

長野山梨の旅 2024



2024年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

長野県小諸市のユースホステルに泊まってフォークソングのライブを聞いてきた。小諸に行ったついでに小海線を南下し、山梨県の珍しい宿に泊まり、2泊3日の旅をしてきた。

■ 暑中見舞の葉書

私は長野県小諸市にある小諸ユースホステル（以下 YH）に過去 2 回泊まったことがあり、今年の夏にはその YH から暑中見舞の葉書が届いた。その中にはフォーク歌手「小室等」のフォークライブを 10 月にやると書かれていた。そのコンサートは毎年行われていることを知っていたが、今年が最後になりそうだとの一文があった。

この葉書を見て私の中で眠っていたフォークソングの虫が騒ぎだした。

私は高校そして大学時代にフォークソングが大好きで、いくつかバンドを結成し、コンサートにも何度も出演していた。

もちろん小室等は知っていたが、生で聞いたことがなかった。



【高校時代の私たちのバンドのステージ】

早速このことを私が酒の師と仰ぐ“師匠”に伝えると、彼もフォークソングが好きですぐに行くことが決まった。どうせ小諸まで行くならば、飲んで鉄道を楽しむ飲み鉄、そして歩き旅も一緒にやってしまうという結論になり、今回のフォーク&飲み鉄・歩き旅を計画した。

■ 歩き旅&飲み鉄が始まる

10 月の中旬の晴れた日、私と師匠は横浜駅から高崎線直通の JR の各駅停車のグリーン車に座って朝からビールを飲んでいる。酒の肴は車窓から見る景色で、大都会から郊外へ、そして関東平野を走り抜けていく。

群馬県の高崎駅で信越本線に乗り換えて、横川駅まで乗ると、JR のバスが待っている。

この駅はかつて駅弁“峠の釜めし”で有名だったが、新幹線が開通したために横川駅から先の軽井沢駅までの線路が廃線になった。

地元民は複雑な思いだったに違いない。新幹線を誘致したら、在来線が廃止になることなど夢にも思っていなかっただろう。

それでも軽井沢から先の長野県側では、しなの鉄道という第三セクターが JR 東日本から事業を引き継いで列車を運行させている。ただし経営母体が小さくなったので運賃はかなり値上がりした。また地方自治体が母体なので、県境をまたいでの運行には至らず、横川—軽井沢間は JR バスが運行している。



【横川駅】

新幹線は旅行やビジネスにはありがたいが、地元民は滅多に乗らない。それなのに生活の足が奪われるとは・・・。

■バスに乗る

JR バスは満員になっている。こんなに混むならば廃線にすることもないのと思うが、今日は秋の行楽シーズンの 3 連休の中日ということで混んでいない方がおかしい。おそらく平日の昼間となれば乗客はほとんどいないだろう。

席に座ると、隣の席には地元民らしいおばさんが座っており、私に話かけてきた。

彼女は日頃話す相手がないのか、様々な話をしてきた。その中にはこんなことまで話しているのかという内容までであったが、私は相槌を打ちながら聞き役に徹していた。

しかしいつまでもこのおばさんの人生の苦楽を聞いていもしょうがないから、私から質問を試みる。「大変な人生でしたね、でも今どこか旅行に行くとしたらどこに行きたいですか？」と訊ねると、彼女は「あの世かな」と答える。私は「どうして？」と聞き返すと、彼女は得意そうに「とてもいいところだそうで、だから誰も戻ってこない」と言っている。

そして再び身の上話に戻り、私は再び聞き役に回る。

■長い登り坂

軽井沢で、しなの鉄道に乗り換えて小諸駅で降り、小諸 YH までを歩くことになる。これから歩き旅が始まる。

この一帯は浅間山の裾野になり、目指す小諸 YH はその中腹の標高約 1000m にある。小諸駅の標高は約 660m なので、標高差 340m、その距離約 6.5km を歩くことになる。

私も師匠も、この程度の距離はいつも歩いており、あまり考えずに歩き始めるが、これがとんでもなかった。

100m で 5m 登る坂はそれほど急坂ではないが、これが延々と 1 時間半も続くと相当にこたえる。時刻は昼間の 1 時、頭上から太陽が照り付けている。10 月だというのにその威力はかなりのものになっている。さらに 2 泊 3 日の荷物はそれなりに重く、先ほどまで飲んでいたビールの酔いは歩く妨げにはなっても助けにはならない。

小諸 YH に着いた時には、私の下着や服はびしょりで、すぐに着替える。



【小諸 YH】

■ライブコンサート

コンサートは小諸 YH の食堂で開催される。40 人くらい入れればいっぱいになる会場なので、どの席に座ってもステージとの距離はあまりない。それでも私と師匠はステージのすぐ前に空いている席を見つけ、いわゆる“かぶりつき”に陣取る。

コンサートは「小室等&こむろゆいフォークライブ」と称されている。小室等がギター、娘のこむろゆいがウクレレという珍しい組み合わせだが、スチール弦のギターと、ナイロン弦のウクレレの音は意外に相性よく、父娘のデュエットも素晴らしい。

小室等は 80 歳というが、その声からその年齢は感じられない。若い頃から温厚な歌い方で派手さはなかったが、昔に比べて渋みが増している。

どこかのテレビ番組で彼が「今、もしも若い時の自分に会ったならば、『その若さではこんな歌い方はできないだろう、こうなるには 50 年かかるよ』と伝えたい」と言っていたことを思い出した。

私も師匠も会場にいる 40 人の観客たちも、いつの間にか 1970 年代に引き込まれて、会場は不思議な空気感に包まれていく。



【左：小室等 右：こむろゆい】

円熟した演奏も歌唱力も素晴らしい。そして聴かせるだけでなく、観客とのやり取りや間合いも面白い。

時々、歌詞を忘れて娘に教えてもらうことや、歌い出しを忘れたから娘にイントロをやってくれなどと言いつつシーンがある。この掛け合いが半分は冗談に感じられるが、半分は本当にも感じられる絶妙な父娘のやり取りにほのぼのとしたものを感じる。

何曲か歌い、「上を向いて歩こう」が始まる。すると観客たちも一緒に歌い始める。会場全体に澄み渡る観客たちの綺麗なコーラスは中年合唱団と化して、実に良い雰囲気になっている。

最後に名曲「雨が空から降れば」を歌ってくれる。小室等の数少ない（失礼）ヒット曲で、もちろん会場の中年合唱団も一緒に歌っている。中には涙ぐんでいる人もおり、師匠も目頭を押さえている。それを見ていた私も何故かぐつときてしまう。

この歌にはなんという力があるのだろうか。

小室等は「この歌はどんな時も何でも受け入れてくれる。それはこの歌は何も訴えていないで、ただひたすら“しょうがない”と言っているだけだから」と話す。歌詞を記しておこう。

♪雨が空から降れば、思い出は地面にしみこむ

雨がシトシト降れば、思い出はシトシトにじむ

黒いコウモリ傘をさして街を歩けば、あの街は雨の中、この街も雨の中

電信柱もポストも故郷も雨の中

しょうがない 雨の日はしょうがない

公園のベンチでひとり、お魚を釣れば、お魚もまた雨の中

しょうがない、雨の日はしょうがない、しょうがない、雨の日はしょうがない♪

アンコール曲はテレビドラマ『木枯し紋次郎』の主題歌「誰かが風の中で」になる。もちろん会場の中年合唱団も一緒に、素晴らしいハーモニーで幕を閉じる。

かくして2時間半のコンサートは終わり、私たちは現実の社会に引き戻される。

■ユースホステル談議

YHは男女別の相部屋なので、部屋には私と師匠とあと2人が泊まっている。若者とおじさんで、聞くと2人は親子だという。

昔のYHは禁酒だったが、今では酒を解禁しているYHも多く、この小諸YHも解禁しているから、一杯やりながら父親と話をする。

父親は今でもアマチュアバンドをやっており、若い頃から旅をして、このYHにも泊まったという。息子は鉄道オタクだというが未成年なので私たちのような飲み鉄ではなく、撮り鉄をしている。

今日のコンサートのことや旅の話などで盛り上がる。未成年の息子は小室等の歌を初めて聴いたとのことだが、「あの歌が分かるには50年かかりそうですね」と言っている。

翌日の朝食の食卓でも別の宿泊者たちとYH談議に花が咲く。

YHの数は1974年の最盛期には日本国内で587を数えた。それはちょうど小室等やフォークソング全盛期に重なる。そして現在日本にあるYHの数は138になっている。時代背景や若者の旅の多様化により仕方ないことだが、自分たちだけでも老後にむけてYHを楽しみたいという声が聞こえてくる。

また、今の若者にYHを説明するのに四苦八苦しているという。ドミトリーともゲストハウスとも例えられるが何となく違う。やはりその役割が終わったのかもしれない。

この時、私は無性に現在残っている日本のYHを訪れたいくなり、YH宿泊を目的にした旅行計画を考え始める。そのことを師匠に話すと、彼もまた乗り気だ。

朝食を終えて、小諸YHから小諸駅まで歩く。昨日とは違って長い下り坂で、前から朝日を受けて風が心地よい。



【小諸駅までの長い下り坂】

■食事処「みよしや」

小諸駅からJR小海線に乗り、再び乗り鉄、そして飲み鉄になる。間もなくして佐久市の臼田駅で降りる。

この地域には若鳥料理「むしり」という名物料理がある。簡単に言えばローストチキンだが、この地域の生活や歴史が感じられる独特の味に仕上がっている。

実は私は昨年この地域を訪れてむしりを食べており、とても美味かった思い出がある。今回も昨年同様に食事処「みよしや」を訪れる。(旅行記「信州上州グルメ旅 2023」参照)

店に入り、むしりを注文すると、焼くのに1時間かかると言われる。昨年は車で来たので時間を気にしなかったが、電車を1本逃がすと2時間後になるので、注文するのを躊躇する。

そんな時、隣の席で一杯やっている中年男性が食べている小皿が目に入る。むしりを割いて小皿に盛り付けた酒のつまみのようなもので、店主に聞くとそれならばすぐに出せると言っており、同じものを注文する。隣のお客が食べているもの指して同じものを注文するという手口は、海外旅行で良く使う。そしてそれはあまり失敗がない。



【むしり 昨年の写真】



【むしりをほぐしたつまみ 今回の写真】

中年男性の隣には中年女性が座っており、2人で東京都内の電車の乗り継ぎの話をしている。〇〇駅への行き方が分からないとか話している。その駅名は私と師匠が勤めていた会社の近くの駅で、ついつい2人の会話に口をはさんでしまった。

すると案の定、教えてほしいと乗ってきた。そこで私たちが何故詳しいかのから始まり、この店に来た理由、昨年も来たこともなども話す。そうするとすぐに意気投合して、彼らが東京に行く理由も教えてもらう。

彼と彼女は同級生で、彼らの同級生が東京で高級フランス料理店を出しており、そこに食べに行く算段をしているという。その同級生と撮った写真も見せてもらう。

私が「この女優さんは誰ですか？」と白々しく聞くと、彼女は「そんな不格好な女優はいませんよ」と言いながらも「お上手ねえ」と言ってまんざらでもない。師匠も追い打ちをかけるように「この女優さん、どこかで見たような・・・」と言いながら彼女の顔を覗き込む。彼女はまた「お上手ね」といっているが、笑みに変わっている。

その後も何かにつけて彼女に向かって「女優さん」と言い続けていると、写真を撮ることになり、満面の笑みを浮かべてポーズをとってくれる。もはや完全に女優になりきっている。

地元の女優との語らい、名物料理むしり、そしてビールの力も借りて、実に楽しい時間を過ごすことができた。最後にこの店の評判料理の鳥そばを食べて、店を後にする。

■おいしい学校

JR 小海線の甲斐大泉駅まで電車に乗って、駅から約 9km 先の「三代校舎ふれあいの里」という施設を目指して歩きはじめる。道は平たんもしくは下り坂で、車の台数が少ないので歩き易い。

目的の施設は八ヶ岳、南アルプス、富士山に囲まれた津金という地にあり、古い小学校を利用したもので、敷地内には明治・大正・昭和の校舎がある。

明治の校舎は当時のもので、記念館になっていて入場料を払うと見物できる。大正の校舎は再建したもので、ほうとう作りなどの団体客向けの体験施設になっている。昭和の校舎は「おいしい学校」と呼ばれている施設で、和と洋のレストラン、パン工房、宿泊施設、日帰り入浴施設がある。ここも再建されたもので古い雰囲気を出してはいるが比較的新しい。



【三代校舎ふれあいの里 右：明治の校舎 左：大正の校舎】

今宵はおいしい学校の宿泊施設に泊まる。木造で木の香りが漂い、気持ちがいい。部屋も広くて新しい。大浴場は温泉ではないが広々としており、湯の温度が異なる 3 つの浴槽があって、好きな温度の湯に浸ることができる。ハーブの湯とは書いてあるが、その香りはほとんどしない。



【昭和の校舎 おいしい学校の正面玄関】

夕食は給食室と書かれた部屋で、「ほうとう給食」を食べる。みそ汁代わりに山梨名物のほうとう、野菜のかき揚げ、サラダ、炊き込みご飯、そして何故か牛乳も付いている。給食の雰囲気を出すためにアルマイトの食器を使っている。

給食にこだわっているのは分かるが、当時の給食を再現したものでもなく、給食風定食と言うものだろう。

朝食は洋のレストランでいただく。こちらは給食ではなく、イタリアの朝食の雰囲気を出そうとしている。味はなかなか美味いが、本格的イタリアンというには何かが足りないような気がする。



【夕食のほうとう給食】



【イタリアンの朝食】

食事も風呂も部屋も、どれも及第点だが、私にとっていまひとつ感動がない。

その理由をあれこれ考えると、全てのものは本物ではないことだろう。いや、本物を望むのは無理としても、徹し切れていない。どれも中途半端な本物風で終わっている。

おいしい学校を出て、近くに本物の古民家「なかや」がある。この家は江戸時代後期に建てられたもので、囲炉裏や馬屋なども残っている数少ない古民家で、宿泊体験もできる。

本格的な田舎暮らし体験ならば、こちらの宿がおすすめだが、綺麗でゆったりと快適に過ごすならばおいしい学校に軍配があがる。



【古民家 なかや】

■看板

おいしい学校から約 12km 先の JR 中央線の長坂駅まで歩いていると、あるレストランで面白い看板を見つける。そこには「パワー充電中！ 定休日」と書かれている。

私と師匠は営業中の看板はどうなるのか、2人で想像し、色々意見を出し始める。

「パワー全開！営業中」、「電池切れるまで、営業します！」、「営業中 エネルギー満タンにした人どうぞ！」等々。ひとつの看板でも、その表現によってここまで面白くなるのか。

■ソースかつ丼

長坂駅前には、いかにも田舎の食堂という「みなと食堂」という店がある。入ってみると驚くべきことを発見する。それは何とメニューに“ソースかつ丼”がある。ソースかつ丼評論家を自負する私にとって、これは全く予期していなかった。

ソースかつ丼は私が名付けた4大聖地があり、それは会津若松、桐生、駒ケ根、福井になる。他にもソースかつ丼を名物にしている地域があるが、4大聖地の近くか新興勢力で歴史がない。

ここは4大聖地から遠い。新興勢力でもない証拠に店内には古い張り紙がはってある。

その張り紙には、「県外からのお客さんへ 山梨県のかつ丼とは、揚げたとんかつとキャベツが丼の上ののるソースかつ丼のことです。東京風の玉子でとじたかつ丼は、煮かつ丼と言って注文して下さい」と書かれている。

私は思わず、店の女将に「このソースかつ丼はいつ頃からですか？」と尋ねる。すると女将は「昭和の頃からです」と言っている。私は「戦後ですよ」と聞き直すと、彼女は「もちろんよ」と、ややご立腹だ。彼女は「そんなに歳を取っていませんよ」と言いたかったのだろう。

私たちはビールとソースかつ丼を注文する。しばらくすると厨房から油でカツを揚げる音が聞こえてくる。つまり注文を受けてからカツを揚げている。これはソースかつ丼の評価において重要だ。揚げて時間が経ったカツを使うと、衣のサクサク感がしない。

そんな期待をしながらビールを飲んで待っていると、出てきたソースかつ丼に私は驚いた。思っていたのと全く違う。

ご飯を盛った丼の上にキャベツを敷いて、単にカツをのせただけになっている。ソースは自分でかけるようで、市販のとんかつソースがでてきた。

これはとんかつ定食を丼に盛っただけで、ソースかつ丼ではなく“とんかつ丼”と呼んだ方がいいだろう。ソースかつ丼としての工夫や主張がない。

これは私の持論の「期待と落胆」そのものになる。期待し過ぎて、それが裏切られると落胆に変わる。

ただ、揚げたてのカツなので、食感はサクサクとしている。もちろん味は普通のとんかつ定食だった。



【長坂駅前「みなと食堂」のソースかつ丼】

■旅の記録

実施は2024年10月13（日）～15日（火）の2泊3日の旅の行程を示す。

- ・1日目 朝6時に自宅を出て友人と横浜駅で待ち合わせ、高崎駅までグリーン車に乗り、横川駅まで信越本線、JRバスで軽井沢駅、しなの鉄道で小諸駅まで電車に乗り、車内で軽食、小諸駅から6.5kmを歩き「小諸ユースホステル」にチェックイン
14時から「小室等&こむろゆいフォークライブ」、その後に簡単な夕食
この日の歩数 13588 歩
- ・2日目 9時に宿を出て小諸駅まで歩き、小海線でJR白田駅へ、稲荷神社、稲荷山公園、昼食は食事処「みよしや」で名物「むしり」を食べ、白田駅に戻り
小海線で甲斐大泉駅へ、駅から約9kmを歩き16時「おいしい学校」チェックイン
この日の歩数 28366 歩
- ・3日目 9時に宿を出て、「たかねの湯」経由で12kmを歩き、JR長坂駅、駅前の「みなと食堂」でソースかつ丼の昼食、中央線で帰途へ、打ち上げ後帰宅
この日の歩数 24031 歩、3日間合計で 65985 歩

費用は総合計で約32000円、詳細を以下に示す。

小諸ユースホステル	5610円（朝食付き宿泊料）
	700円（夕食）
	4500円（小室等&こむろゆいフォークライブ）
おいしい学校	8800円（朝食付き宿泊料）
	1200円（夕食のほうとう給食）
交通費	約7000円（JR、バス、しなの鉄道など）
昼食と飲み物代	約4000円